青陵

第178号

二〇二五年一一月一八日発行
発行者　奈良県立橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者　清水康二

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
開館八五周年にあたって

川上洋一

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館は、その前身である「大和国史館」が一九四〇年（昭和一五）一一月一八日に開館してから、本年で八五周年を迎えました。現在、国宝二件、重要文化財一二件を始めとする重要な考古資料を多数収蔵・展示し、考古学をテーマとする博物館としては、我が国有数の規模と内容を有しています。開館以来、組織・名称の変遷がありましたが、一九八〇年（昭和五五）に現在の名称となりました。そして緑美しい山容の畝傍山を背景に建つ現在の博物館の建物は、その同じ年に建設工事が完了したものです。

当博物館は、日本の歴史を語る上できわめて重要な地域である奈良県において、県立の考古学専門の研究機関である奈良県立橿原考古学研究所の附属博物館として、研究所の特色である発掘調査、研究、報告、出土資料の保存、保管、展示、情報発信が一体化した活動の一翼を担っています。橿原考古学研究所は、これまで県内各地で数々の重要な発掘調査とその結果の研究、報告を日々おこない、奈良県、ひいては日本の歴史の解明に貢献してきました。そして、それらの膨大な貴重な資料や研究成果を博物館の常設展「大和の考古学」で体系的に展示して、その歴史的な意義を社会に発信しています。また、「研究所附属博物館」として、県内の発掘調査の最新の成果を展示する速報展や、学芸員の研究成果を発信する特別展や特別陳列を開催できる優れた条件を備えています。

地域の歴史的環境や学校の歴史の授業など、さまざまなきっかけによって考古学に興味を持ち、たびたび当博物館へ足を運んでくださる多くの方々がおられる一方で、昨年の春に開催した富雄丸山古墳出土の蛇行剣の特別公開には、それまでは考古学にそれほど詳しくなくても、テレビや新聞、ネットで蛇行剣の情報に接した多くの方々が初めて来館されました。その際に併せて常設展もご覧になって、こんなにすごいものが県内でたくさん出土していて、一堂にこの博物館で展示されていることを初めて知った、と言われる方々が大勢おられました。当館の常設展のことを知り、評価していただくよい機会となりました。

当館では最近、考古学のみの切り口でないテーマの特別陳列やクラッシックのコンサートなどを開催し、新たな来館者の掘り起こしを目指す工夫を重ねてきました。今後も常設展や展覧会、講演会、イベントなどの情報を効果的に発信し、より多くの方々が、これは日本国内からだけでなく、奈良県を訪れる外国の方々も奈良、日本の歴史を知るためにお越しいただけるように努めてまいります。

最後になりましたが、本年開館八五周年を迎えることができましたのは、一九五五年に大和歴史館友史会として七五名で発足した奈良県立橿原考古学研究所友史会、公益財団法人由良大和古代文化研究協会、さらに一般財団法人橿原考古文化財団をはじめとする多くの方々のご理解とご支援のたまものと思います。心より御礼を申し上げます。

今後とも、開館八五周年という長い年月の重みを誇りとして多くの重要な出土品を大切に保管、展示するとともに、当館の特色をもって考古学の魅力をさまざまな形で広く発信してゆく博物館でありたいと思います。皆様のご理解と益々のご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

目次

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　川上洋一　1
開館八五周年にあたって
奈良市南肘塚町出土石造物について　西谷漸・中野咲　2
令和六年度中国派遣報告　内藤元太　4
七年ぶりの研修　南浩鉉　6
附属博物館展示案内・アトリウム展示案内　8

編集者

奈良市南肘塚町出土石造物について

西谷　漸・中野　咲

一．出土地点と経緯

本稿で紹介する資料は、奈良市南肘塚町地内において実施された能登川自然災害防止対策事業にともなう工事掘削中に不時発見された（図1）。出土地点は奈良県遺跡地図では周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外となっている。

令和四年五月二日、奈良県文化財保存課（当時）に工事の事業主体である奈良土木事務所から、工事中に石造物が三点出土したと連絡があった。現地で出土状況および出土遺物を確認した結果、三点の石造物は浚渫工事の際に出土しており、近現代の河川堆積中に包蔵されていた。このことから、出土資料はおそらく近隣から流入したものと想定される。

中世末期以降の石造物に対する考古学研究の成果は、近年増加しつつある。本稿では研究進展の一助となるよう、資料の補充を行う。（中野）

図1　出土位置および関係地名
（国土地理院地図に加筆、S=1/12,000）

二．資料の概要

（一）有像板碑（図2－1）

1は花崗岩製で、圭頭板碑に仏像を二体陽刻している。板碑高は六七・〇cm、幅二八・八cm、厚さ一八・〇cmである。頂部の形態は底部から五五・〇cm付近で頂部に向かって内傾し、圭頭状を形成している。圭頭には幅が約三cmの二条線が〇・四～〇・六cm程度彫り込まれて階段状につくり出されている。

底部には直径約一〇×八cmのホゾの痕跡が認められ、本来は反花座を伴って造立したと考えられる。

仏像のうち右側は高さ約二八・五cm、肩幅一〇cmで、摩耗により確証を得るには至らないが、施無畏与願印、または来迎印を結ぶ立像である。印から釈迦如来立像か阿弥陀如来立像が想定される。左側は高さ二九・〇cm、肩幅九・六cmで、合掌印を結ぶ地蔵立像である。両立像ともに一四世紀頃の石仏に比べて体の幅が広く、頭部の割合が大きい。仏像高に対する頭部高は、如来立像が三割強、合掌地蔵立像が三割弱である。また、彫り込みの深さが約四cmとや

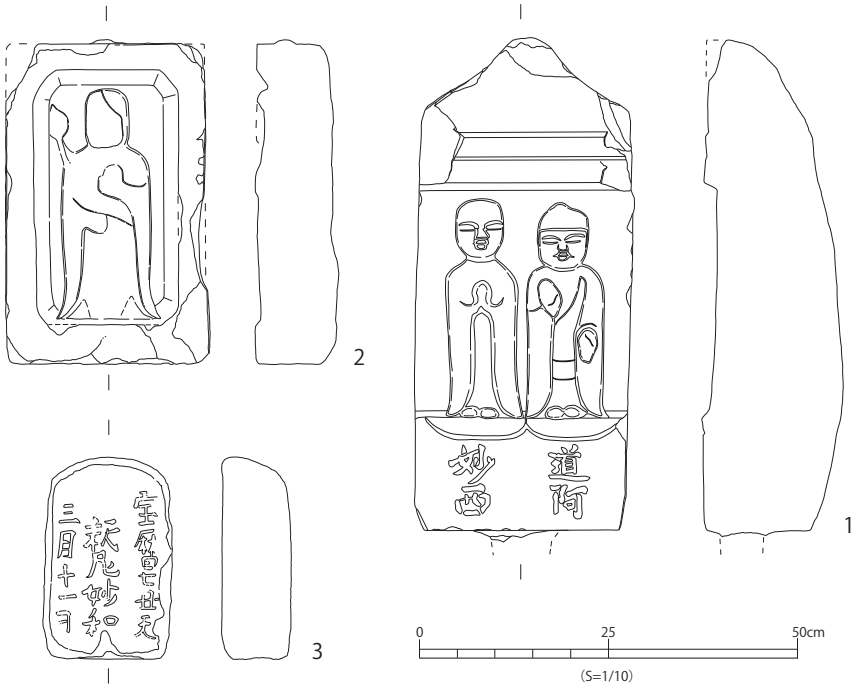

図2　出土資料（1：有像板碑、2：石龕仏、3：櫛形墓標）

や浅く、仏像や衣紋の表現が省略され、衣紋の裾が足もとに密接する特徴がある。

銘文は、「道阿」「妙西」の二名の法名が刻まれている。

（二）石龕仏（図2－2）

2は花崗閃緑岩製で、箱形を呈した枠の内側に仏像を一体陽刻している。高さ四三・〇㎝、幅二七・〇㎝、厚さ一一・五㎝である。枠幅は三・五～三・八㎝程度、彫り込みの深さは一・四㎝でやや浅い。箱上部には直径約三㎝のホゾが認められ、本来は箱上部に笠を伴った形態であったと考えられる。

仏像は高さ三〇・四㎝、肩幅一二・〇㎝で、像姿は摩耗しているがわずかに錫杖と宝珠の表現が認められる。有像板碑（1）と同様に体の幅が広く、頭部の割合がやや大きい。仏像高に対する頭部高は三割弱である。また、彫り込みの深さが約一㎝と浅く、衣紋や像容が形骸化し、足の表現も曖昧である。

（三）櫛形墓標（図2－3）

3は花崗岩製で、位牌形を呈する。高さ二七・四㎝、幅一六・九㎝、厚さ九・〇㎝である。現状は風化により、外形や銘文が摩耗し、不明瞭である。

墓標は、正面は平滑に調整されるが、左右面、背面は未調整で、正面のみに銘文を刻む形態である。

銘文は一部が風化しているが、「宝暦七丑天／(釈)尼妙和／三月十一日」と解読できる。このことから被葬者の没年が一七五七年であり、この前後に製作されたことがわかる。

三．資料の年代的置づけ

次にこれら資料の年代的位置づけについて考えていきたい。

まず有像板碑（1）である。形態が異なるが、元興寺極楽坊の舟形五輪塔では、一六〇〇年頃を境に法名から戒名への変化が指摘されている[1]。また、像容は一六世紀に入ると仏像や衣紋がやや形骸化し、耳の表現が省略され、衣紋の裾が足もとに密接する特徴が如実に表れる傾向にある[2]。元興寺極楽坊における既報告の類似資料においては、当該資料に比べて頭部高の占める割合が大きいものの、像容で同様の特徴を有する石仏が天正年間に集中している[3]。これらの類例から、当該資料は一六世紀第3四半期から一六世紀第4四半期頃の造立と位置づけられる。

つぎに石龕仏（2）である。石龕仏は一六世紀末の造立末期においては笠を伴わない形態に変化するため、当該資料はそれ以前の資料といえる。小型の石龕仏のうち紀年銘が刻まれた事例は希薄で、伊賀では一六世紀第1四半期に位置づけられる事例の報告がある[4]。これらの事例では錫杖が錫杖頭まで精緻に彫られ、衣紋や足の形状まで明確に表現される。これらとの像容の差異を考慮すると、当該資料は一六世紀第1四半期以降の造立と位置づけられる。

最後に櫛形墓標（3）である。元興寺極楽坊において、櫛形墓標は一六九一～一八〇〇年にかけて造立され、その造立の主要年代は一六九一～一七八〇年頃である[5]。また元興寺極楽坊の櫛形墓標の高さは三〇～五〇㎝と当該資料と同程度で、石材は花崗岩と砂岩が主体である点も当該資料と合致する。

四．奈良町における出土の意義

最後に報告資料の由来の検討および隣接する奈良町石造物集積との対比を行う。

出土地点から南に約二〇m地点には、かつて不動堂とよばれる石造物集積が所在しており（図1）、一六世紀代の石仏や名号碑、一七世紀代の不動明王石仏や供養碑、一九世紀代の句碑など三二点が集積されていた[6]。この不動堂は一九三六～二〇〇二年まで所在しており、撤去に際して石造物は元興寺に寄託された。立会地点との位置関係から、今回の報告資料はこの不動堂の前身の施設に由来する可能性が高い。

奈良町では寺院や墓地以外の場所で五～二〇基の石造物が集積され祀られている景観が認められる。これらについては一六～一七世紀に造立の中心があり、寺院や境内墓地との関係を有さず各町内（旧字）単位で存在し、管理は区（町）有という特徴がある。狭川真一氏は、これらが一八世紀頃の寺檀家制度成立以前の一六～一七世紀の都市内部における宗教祭祀行為について物語る資料であると指摘する[7]。

これらの集積と比較すると、今回の報告資料や不動堂の石造物は、一八世紀以降の資料を含むという点で年代的な差異がある。また、不動堂においては既報の資料が一部であるものの、信仰や供養に起因する資料が中心で、今回報告した墓の性格を有する資料を欠く点も異なっている。

なお、出土地点から川沿いに西へ約一五〇m下った字福寺地区（図1）

には、一六～一八世紀代の墓標が多数集積されている。狭川氏は周辺に一八世紀に廃絶した福寺の存在を想定し、集積は福寺の墓所に伴う可能性が高いと指摘する。[8]

福寺地区の事例は、近世寺院としての福寺の存在が未確認である点に問題があるものの、先の評価を敷衍すると、奈良町には寺院や墓地の石造物集積と、それらに属さない石造物集積があり、年代と性格が異なる多様なあり方が想起される。不動堂の石造物集積も資料の全容が明らかではないものの、他の奈良町の石造物集積とは石造物の年代や組成に差異があり、集積の背景が異なる可能性がある。ここでは、奈良町における近世寺院に関連する資料の増加を待ちつつ、奈良町の石造物集積の性格の差異の整理を今後の課題として、本報告のまとめとしたい。（西谷）

謝辞　本稿を執筆するにあたり、大阪大谷大学の狭川真一氏にご教授を賜りました。また、奈良町の資料について奈良市埋蔵文化財調査センターの中島和彦氏、原田憲次郎氏のご教示を得ました。末尾になりましたが御礼申し上げます。

註

（1）藤澤典彦二〇一二「墓上の石塔」『中世石塔の考古学』高志書院

（2）藤澤典彦・狭川真一編二〇一七『石塔調べのコツとツボ』高志書院

（3）辻村泰圓編一九七七『日本仏教民俗基礎資料集成』第四巻　元興寺極楽坊Ⅳ　中央公論美術出版

（4）市田進一編二〇一二『伊賀の石仏拓本集』私家版

（5）木下密運一九六七「元興寺極楽坊板碑群の調査研究－その形式的変遷を中心として－」『元興寺仏教民俗資料研究年報一九六七年』元興寺文化財研究所

（6）奈良市史編纂審議会編一九八五『奈良市史　社寺編』吉川弘文館

（7）狭川真一さん還暦記念会編二〇一九『墓と石塔の考古学－墓と石造物に戯れて実は半世紀－』狭川真一さん還暦記念講演会資料集　同記念会

（8）註7文献。なお、福寺は「大乗院寺社雑事記」にみられ、戦国時代に焼失したとされる。字福寺に所在した福寺池で採集された軒丸瓦により、創建時期は奈良時代まで遡ると指摘されている（（公財）元興寺文化財研究所編二〇一七『ならまちの南玄関－肘塚・京終の歴史文化－』同研究所）。

令和六年度中国派遣報告

内藤元太

令和七年一月七日から三月二五日までの七八日間、中国陝西省考古研究院（以下研究院と呼称する）で研修を受ける機会を頂いた。私は現在中国の唐代以前の古代建築について勉強を進めており、研修に参加できたことは大変嬉しかった。研究院側には関心のある遺跡の見学や資料の集成の時間を設けてほしい旨を事前に伝えていたが、現地では研究院の仕事を全体的に見学し、その仕事を把握するといったプログラムが用意されていた。事前に想定していた研修とはやや内容が異なってはいたが、数多くの職員の方と交流できたことや、保存科学を含め専門外の分野の仕事を見学できたことは意義深いことであった。

研究院には百数十名の専門職員が在籍しており、最初に見学した社会教育部では三〇代半ばの王沛氏と研究院附属の博物館に関わる仕事を見学した。この部門でお世話になった方々は全員女性で、女性職員比率の高さが日本とは大きく異なっていた。子供たちを研究院に連れて来て面倒を見つつ仕事をするのはごく普通であり、研究院は女性にとって働きやすい環境であると感じた。交通が不便であるにも関わらず博物館には毎日多くの人々が訪れており、解説員に積極的に質問をしている来館者が多いことが印象的であった。博物館の休館日には毎週展示物の点検がおこなわれ細やかな対応がなされていた。

その後陝西省内外の遺跡や博物館を見学する三週間程の期間を経て、保存科学センターでは二〇代半ばの黄河氏の案内で金属器、陶器、壁画、繊維、脆弱遺物、骨、大型遺物、微細遺物など各遺物の修復作業の見学をした後、唐代壁画の修復作業に実際に参加した。壁画の多くが国宝である国から来た人間にとっては、ガラス越しではない壁画に近づくということさえ恐怖体験ではあったが緊張感を持ちながら作業をおこなった。

派遣当時の中国はかなりの就職氷河期であった。その中で研究院の正規職員となった黄河氏は「運が良か

ただけ」と謙遜していたが、一回で中国語の説明を理解しない私に対して何度もわかりやすく保存科学のことや中国の文化財行政のことを教えてくれる優しい方で、相当優秀な人物であることを日々感じた。

研究院は宿泊施設と食堂を伴った基地を各地に設置しているが、そこでは発掘調査や報告に向けた整理作業がおこなわれている。二月二五日からは同じく研究院に研修に来ていたフランス国立文化遺産研究所(Institut national du patrimoine)の二〇代後半のHéloïse GUYON氏と共に、研究院の収蔵庫である涇渭基地、石峁遺跡調査隊の基地、西安市西部の発掘調査を担当している城西基地、南部を担当している城南基地を見学した。

半坡遺跡の見学

特に石峁遺跡の見学は最も印象深く、遺跡中心の皇城台の見学をさせていただけたことは非常に幸運であった。ここでは、二〇二三年度に発掘された竪穴墓群や城を構成する石垣と彫刻、排水施設、残存状態の良い石積み壁住居や版築壁住居などを見学できた。整備がそれほど進んでいない遺跡の踏査中には裴学松氏が卜骨を表採するなど貴重な場面にも立ち会うことができた。

西安に戻った後に見学した城西基地では中国でおこなわれている発掘調査の様子を初めて見学した。印象的であったことは、大学で考古学を専攻しておらず現場で発掘を覚え、研究院がおこなう発掘調査の技能試験に合格した人材が現場監督として発掘調査をおこなうこともあるというところである。

当初は人員的に充実した活動をおこなっているような印象を持ったが、発掘調査の速度は極めて速く、面積も膨大であり研究院の規模の大きさをもってしてもなお人員が不足しているように見え、発掘調査への需要に対応する苦労が感じられた。どの遺跡でも大型で深度のある遺構が主に検出されていたが、柱穴など建物に関する遺構は検出されていなかった。担当者の説明では、遺存する本来の遺構面で遺構確認をおこなうと攪乱が多すぎること、大型の遺構や墓の調査が最重要であることからあえて深めに重機掘削がおこなわれているとのことであった。中国の都市部における住居址の発掘事例は極めて少ないが、遺跡の内容が豊富すぎる中国ならではの事情があるかもしれないことを知った。

日々の研修のほか、橿原考古学研究所に来ていた朱雨霽さんをはじめとした多くの同年代の方々と交流できたことも大変有意義であって、事前に描いていた中国のイメージと異なる経験もした。例えば中国では宴会で大量に飲酒するイメージがあったが、現在の若い人はほとんどお酒を飲まない。これには時代の変化を感じた。

その他、私は日本のお菓子を中国へのお土産に持って行ったが、複数の方から日本のお菓子の多くは中国人にとって塩辛すぎるか甘すぎると感想をいただいた。この感想は現地の料理の味の濃さに少々疲れ気味であった私にとって意外であったが、確かに油気を除けば中国の料理の塩気やお菓子の甘さは日本より薄目であることに気づいた。評判がよかったお菓子は「じゃがりこ」であった。中国の若い方々の中には日本のアニメやテレビドラマを楽しんでいる方も多くそれらの話題で盛り上がることもあった。

日本の考古学について説明する際はユーチューブにアップロードされている橿原考古学研究所の動画を用いたが、過去中国に行き来した人の体験記が載っている青陵を含め、ウェブ上に公開されている資料は海外において大変有益であった。

研修中最も会話した人物はHéloïse GUYON氏となった。空いた時間に彼女とは各地に出かけ、中国語がわからない彼女のために中国語と英語どちらの語学レベルも低い私が一生懸命翻訳をする場面が多々あった。フランスの文化財行政の話は大変興味深かった。彼女の話からは美術や文化財に対する保護の意識に誇りを持っていることが感じられた。出土人骨を棺に入れ尊重しなければならない法律があることなどもかなり日本と異なりユニークであると思った。

研修期間中は資料集成のため研究

最終日に開いて頂いた送別会

院の図書閲覧室で中国の雑誌を過去に遡って閲覧したが、二〇〇〇年代初頭くらいまでは、手法を学ぶといった記事の中で日本の話題は頻繁に登場していた印象を持った。その後二〇年以上経た現在の中国の考古学関係機関は規模が非常に大きくなり、日本よりも中国の方が調査手法や保存科学技法において、先進的な試みをおこなっている点も多い。中国社会の変化の速度は速い。日本と中国の関係性も一定ではなく時代を経るにつれ変化している。そのような中でも日中双方職員の派遣研修を続け、あの人と「遺跡の見学に行った」、「食事をしながら世間話をした」といった交流の記憶が個人レベルで残り続けることが双方の国の考古学技術を学ぶといった実務的な意味を超えて、実は最も重要なことであると思う。

今回お世話になった方々のご恩を忘れず、今後も学んだことやできた人脈を活かし、自分の仕事が奈良という地域だけでなく日本の歴史や文化に意義付けを与えているという意味で、世界と地続きに関連していることを少しでも意識しながら職務に邁進していきたい。

七年ぶりの研修

南浩鉉（ナム ホ ヒョン）

一．はじめに

本稿は、橿原考古学研究所（以下、橿考研）でおこなわれた発掘交流研修に参加した経験と所感をまとめた記録である。研修参加が決定したのは二〇二四年一一月であった。実は七年前、韓国国立文化財研究院（現文化遺産研究院）が主管する交流プログラムで日本の研修に参加した経験があり、再び研修の機会が与えられるとは予想していなかった。

しかし、筆者が扶余文化遺産研究所（以下、扶余所）に赴任した二〇二四年から独自の交流プログラムが新設され、偶然にもその年の一一月まで二〇二五年度の研修対象者が未定の状態であった。当初は他の研究員が参加する可能性が高かったと推察されるが、組織貢献度（と書いて年功序列と読む）が考慮されたおかげで、新任にもかかわらず研修対象者に選ばれることができた。

研修が決定すると、「前回の研修での心残りを挽回できるかもしれない」という単純な期待と共に、久しぶりの関西訪問へのときめきが交錯した。短い研修期間を考慮し、実現可能な三つの主要目標を設定した。第一に、日本の発掘現場における運営システムおよび調査方法論の把握。第二に、古代山城および渡来人関連の研究資料収集。第三に、日本文化と生活様式への適応を通じた実用的な会話能力の向上（残念ながら、この目標は頓挫してしまった）。本稿は、これら三つの目標を中心に記述するものである。

二．橿考研の発掘現場への参加

発掘現場は、奈良市の道路建設に伴う緊急発掘調査の現場であり、大安寺の近隣に位置していた。発掘は日本到着後二週目にあたる四月一四日に始まり、実質約二週間参加した。

橿考研の発掘現場を経験し、韓国と比較していくつか注目すべき点を発見した。まず、現場用品の管理が韓国よりもはるかに体系的に行われていた。韓国では、ほとんどの発掘用品を消耗品とみなし、再利用の頻度が低い傾向にある。これは用品自体の品質の問題もあるが、管理不行き届きの責任も少なくない。予算削減が続く現状において、筆者自身から反省すべき点である。

二番目に印象深かったのは、熟練した発掘専門の補助員（専門業者）の存在であった。表土除去はもちろん、遺構実測図の作成まで可能な補助員の役割は非常に驚くべきもので、これは橿考研と扶余所間の発掘システム、特に現場投入人員の構成の違いから生じるものと思われた。韓国の場合、地元住民を臨時雇用して活用するのが一般的であり、発掘業務に特化した専門人材プールは不

在である。近年人口減少により調査人材不足問題が浮上している状況で、このようなシステムは参考になる代案となりうると考えた。さらに、文化庁のマニュアルを遵守する発掘調査は、一定の調査品質を担保する制度的装置として機能するという点で、国内導入検討の必要性を感じた。

他にも注目すべき点は多かったが個人的に最も記憶に残っているのは、現場で味わった様々なラーメンである。日本の発掘現場に不慣れな外国人である筆者を細やかに気遣い、毎日笑顔で一緒にラーメンを共にたべてくださった岡田雅彦さんには本当にご迷惑をかけてしまった（それでも、マリオ流ラーメンと大阪ドロソバの味は本当に格別でした）。

三．古代山城および渡来人関連資料

資料は、東京および九州国立博物館の見学を含む出張に加え、様々な現場訪問を通じておこなわれた。紙面の都合上、奈良県周辺でおこなった資料調査の内容を中心に記述する。

まず、奈良国立博物館の「超国宝展」の観覧は、今回の研修のハイライトと言えるほど素晴らしい展示であった。特に百済観音像、如意輪観音半跏思惟像、七支刀といった貴重な遺物を直接目にすることができたのは大きな幸運であった。田中俊明教授、青柳泰介さんらのおかげで観覧券を十分に確保し、計四回も観覧する機会を得た。

金剛山の磐座と南郷遺跡群の踏査もまた、記憶に残る経験であった。標高九八五ｍの未踏の地を登ることは新たな挑戦であり、渡来人に関連する極楽寺ヒビキ遺跡、南郷大東遺跡などに関する情報は新鮮かつ有益であった。貴重な機会を設けてくださった青柳さんに感謝申し上げる。

高安城の現地踏査も欠かせない。この遺跡は、韓国の研究者の訪問が頻繁な奈良県・大阪府に位置しているものの、韓国の研究者による踏査があまりおこなわれていない場所だ。日本を訪問する前は、彼らの怠慢のせいにしていたが、実際に踏査してみると、外国人研究者が個人的に訪問するにはアクセスが容易ではないことを痛感した。本村充保さんと山田隆文さんのご案内がなければ、踏査は不可能だったであろう。

滋賀県の石塔寺踏査もまた重要な経験であった。現在研究中である扶余の定林寺跡と関連する遺跡として知られており、ぜひ一度直接確認したいと考えていた。実際に目にした姿は実に驚くべきものであった。図面や写真で接した印象とは全く異なる、いわゆる「百済的」なイメージを強く感じさせた。言葉にし難い感慨であったが、個人的には確信に近い印象を受けたと述べたい。石塔寺ほか、百済寺、安土城等の周辺遺跡をご案内いただいた東近江市教育委員会の福田由里子さん、荒川菜々子さん、橿考研の髙木清生さんには、心から感謝している。

研修終盤には、奈良県文化財保存事務所がおこなう興福寺の五重塔修復現場を見学する機会も得た。韓国は戦争などにより現存する木塔がほとんどなく、五重塔発掘調査の際に参考となる資料が不足しているのが実情である。五重塔内部に入り、心礎部を目の前で直接見学できたことは、この上なく貴重な経験となった。

四．日本での生活、文化、言語

研修中、いくつかの研究会に参加する機会もあった。まず、帝塚山大学で開かれた瓦研究会に清水昭博教授のご配慮で参加することができた。上記発掘現場で一緒した岡田さんの発表を通じて、日本の瓦研究の一端を垣間見ることができた。特に「国分寺」関連の瓦供給概念は馴染みがなかったが、非常に興味深かった。

中野咲さんの紹介で、韓国語の論文や報告書を翻訳する研究会にも参加した。ちょうど筆者が過去に調査に参加した「王興寺址発掘報告書」が翻訳されており、大変嬉しく思った。この研究会は、様々な考古学専攻者と考古学資料に関する意見を交換しながら語学の勉強も並行してできるため、個人的に非常に有益な会であった。語学能力の向上を目的とする今後の研修生には、積極的に推薦したい。

その他にも、谷川遼さんとは瓦の

安土城跡大手道にて、左から東近江市教委
福田さん・荒川さん、筆者、髙木さん

共同研究を進めることで意気投合した。研究方法論と対象を考慮すると、非常に興味深い結果が導き出されるものと期待している。状況が許せば、泗沘期の瓦、熊津期の瓦、漢城期の瓦の比較検討も一緒におこなってみたい。また、谷川さんの紹介で奈良大学の小林青樹教授とお会いすることができた。

もし後任の研修生たちに最も勧めたい活動は何かと問われれば、ためらうことなく様々な研究会への参加を挙げる。関連知識を広げ、研究ネットワークを拡張でき、ある意味で研修期間中に最も価値のある機会となりうるからである。

このほか、日本の文化や生活に慣れるため、航空券や新幹線のチケット予約、インターネットショッピングなど、些細なことを自力で解決しようと努力した。日本の通信会社のサービスを利用せず、日本国内の住所がないため制約もあったが可能な範囲で最大限試みた。今では一人で日本の生活を何とかやっていけるだろうという自信もある程度ついた。ただ、試験を中心に学習してきた日本語能力の限界を改めて痛感し、今後の日本語学習の方向性設定という新たな課題を抱えることとなった。

五．おわりに

長いようで短かった日本での研修が終わった。全ての旅がそうであるように、最後の瞬間はいつも名残惜しさが残る。それでも七年ぶりに再訪した関西は依然として暖かく活気に満ちており、現地の方々の温かい人情も感じることができた。昨年、突然の扶余への転勤に戸惑うこともあったが、この変化が橿考研での研修につながったことは、個人的にはこの上ない幸運であったと考えている。今回の研修は、研究者としての道のりにおいて重要な道しるべとなることを確信する。

一方、扶余所で初めて国際交流業務を担当することになり、不慣れな業務に不十分な点が多かった。橿考研での滞在が、韓国の交流プログラムで改善すべき点は何かを顧みるきっかけとなった。今回の研修経験を基に、韓国の交流プログラムをさらに発展させることに貢献したいという、小さな願いを抱くようになった。

二ヶ月間、橿考研の方々にお世話になった。全ての方々のお名前をひとりひとり挙げることは難しいが、改めて深く感謝の意を伝えたい。橿考研の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げる。

附属博物館展示案内

秋季特別展

「きらびやかに送る
－国宝・藤ノ木古墳出土品修理事業成果展1－」

会期：令和七年一〇月四日（土）～一一月三〇日（日）

斑鳩町に所在する藤ノ木古墳は、数少ない未盗掘の大型古墳として著名です。大型の横穴式石室内からは、多量の須恵器、馬具、武器・武具などが出土し、鞍金具は東アジア屈指の名宝として注目されています。さらに、くりぬき式の家形石棺内からも冠、玉類、銅鏡、刀剣、大帯、履などの多量の副葬品が出土し、その豪勢な内容から、葬られた人はかなりの権力者であったことが想定されています。

今回は、現在進行中の国宝・藤ノ木古墳出土品修理事業が節目の五年目を迎えましたので、それを記念して修理が完了した冠、銅鏡、銀装刀子、履などの被葬者の周辺に置かれた葬送用大型装身具を中心に、修理の状況および関連出土品を紹介しながら、従来の切り口とは違う角度から藤ノ木古墳の実態に迫ってみたいと思います。

【研究講座】橿原考古学研究所講堂

・一〇月一九日（日）、一一月九日（日）各回一三時～

・一一月二九日（土）　一〇時～

シンポジウム「保存科学が拓く文化遺産の世界－藤ノ木古墳、沖ノ島祭祀遺跡、そして世界遺産－」

【列品解説】附属博物館

一〇月一一日（土）、一一月一日（土）、一一月二二日（土）

各回一〇時三〇分～、

一四時三〇分～

アトリウム展示案内

研究所一階アトリウムでパネルを中心に展示しています。今回は『40年前の大発見－藤ノ木古墳発掘調査写真展－』を一二月五日（金）まで開催中です。詳細はホームページなどで公開しています。

訃　報

令和七年九月五日（金）に、特別指導研究員の中橋孝博先生が逝去されました。永年の研究所の活動へのご指導とご尽力に感謝いたします。心よりご冥福をお祈り申し上げます。